

ドメニコ・スカルラッチェのソナタ K.96 (L.465) の演奏法について

野間 晃

抄録：本稿は、ドメニコ・スカルラッチェ（1685～1757）の作風を一曲の中に兼ね備えた、ソナタ・ニ長調（K.96, L.465）について、筆者による曲の構成と特色に対する考察に基づき、各演奏家による演奏方法について述べたものである。

キーワード：ドメニコ・スカルラッチェ、ソナタ・ニ長調（K.96, L.465） 演奏法

1. 序

本稿は、同音反復・不協和音・跳躍・旋律と調性の急変・他の楽器の模倣という、ドメニコ・スカルラッチェ（1685-1757）の作風を一曲の中に兼ね備えた、ソナタ・ニ長調（K.96, L.465）についての、諸々の版本による相違点、及び曲の構成と特色に対する、筆者の考察（野間 2017）¹⁾に基づき、この曲が他の楽器による編曲も含め、装飾音, articulation, 版本による違いなどが、演奏家によってどのように表現されているかを分析し、特色を述べようとするものである。

この曲における他の楽器の模倣は、冒頭のトランペットを思わせる旋律を始めとして、カークパトリックが“スカルラッチェは王宮の楽団から他の楽器の語法を借用したが、それと同じくらい村の楽隊からも借用している。こうした方法でないかぎり、けっして王宮のなかにはいりこむようなことのなかった楽器や踊りのリズムが、スカルラッチェのソナタのなかには数多く現れてきているのである。ときにはソナタ 96 番のように、ソナタの終結部分でトランペットとホルン、弦、木管、ドラムなどにギター、カスターネットなども加えられて、たいへんな混乱状態に落ちいってしまうこともあるのである²⁾”，と指摘している通りであるので、本稿では他の楽器による編曲も分析することとした。

本稿においては、筆者の判断により、1. ハープシコードによる演奏(4種)、2. ピアノ(3種)、更に 3. 管弦楽・ギターに編曲されたもの(2種)の、計9種類の演奏を分析した。

分析した演奏については、演奏の特徴の前に、レーベル・演奏者・演奏年・使用楽器などについて、知ることができる限りを記した³⁾。演奏の速さ（♩≐）は、筆者が演奏時間から計算したのものである。

楽譜は：ラルフ・カークパトリック著、荒木雄三訳『スカルラッチェ 60 のソナタ（上）』全音楽譜出版社（出版年記載なし）を参照した。

本稿の完成にあたり、恩師である石田文子先生には、四十余年を経ても変わることのない深い感謝を捧げたいと思う。

2. 本論

それでは、各演奏を聴いていくことにしよう。音源については知られる限りのことを記し（演奏時間はリピートを含む）、分析は、演奏楽器ごと、録音年の順により、カークパトリックによる構成⁴⁾に倣い野間 2017 が用いた構成各部ごとに行う。

2.1 ハープシコード (6種)

まず、ハープシコードによる演奏4種類について述べよう。

2.1.1 Scott Ross (1984～1985 (演奏年, 以下同))

○演奏者: Scott Ross (1951～1989) ○CD名: Domenico Scarlatti ○レーベル・番号 ERATO 2292 45309 2 ○演奏時期: 1984～1985 ○演奏時間: 5分6秒 ○速度: ♩ = 253

《前半》

【開始部】 第1～25小節 tutti

○第1～10小節: 歯切れの良いスタッカート。3回の tr は下から、3回目は長め。

○第11～18小節: 3回の tr は2小節ずつ分ける。左、飛ばないところ以外はノンレガート。

○第19～25小節: rit. なしで第25小節の長いカデンツにつなぐ。tr は下から。

【終極調性開始部】 第26～78小節 solo

○第26～33小節: 3回の tr は次の音が始まるまで長く、左は第35小節を除きノンレガート。

○第33～48小節: 同音反復の始まりのポーズはなし。左はノンレガート。

○第48～56小節: 第48小節の3拍目の前にポーズ。右は歯切れ良く、左はバスのEを響かせリズムを取りながらリズムカルに下降する。

○第56～65小節: 第56小節の3拍目の前に少しポーズ。力強く上下動を繰り返す。

○第65～78小節: 6875小節目のに向かい4小節で高潮する。左手の三和音はアルペジオ。中間部とその繰り返しの第69～71(3拍目の前にポーズ) 76～78小節は軽く流す。

【終極調性確立部】 第78～94節 solo

○第78～94小節: 跳躍部は軽快に飛ばす。ポーズはない。

【終結部】 第94～108小節 tutti

○第94～102小節: 軽快に飛ばす。第94・98小節の2拍目前のポーズはない。左は飛ぶ所以外はレガート。○第102～108小節: 同じメロディーを変化なく繰り返す。

【終止】 108～114小節 tutti

○第110～114小節: 右は2+1, 2+1, 2, 2, 2 (2はレガート) のリズムにより準備してヘミオラへ。
《後半》

【開始部】 第115～137小節 tutti

○一音一音、3拍子ではっきり、ノンレガート。第126小節3拍目の前とカデンツの前でポーズ。

【終極調性開始部】 第138～165小節 solo

○第138～144小節: 右, tr 長く, 左, レガート。○第145～157小節: 同音反復の始まりの前にポーズはない。軽快にさっぱりと第157小節以降のトランペットを思わせる箇所が続く。左, ノンレガート。

○第157～165小節: 1音1音ははっきり、長く弾く。ノンレガート。交差のポーズはない。

【終極調性確立部】 第165～181小節 solo

○第165～181小節: 中間部も変わりなく軽快に続く。

【終結部】 第181～205小節 tutti

○ポーズなし。左は飛ぶところはノンレガート、あとはレガート。

【終止】 第205～211小節 tutti

○第207～211小節: 右は第110～114小節に同じ、しかしリズムは前半ほどははっきりしていない。

2.1.2 Peter-Jan Belder (2001)

○演奏者：Pieter-Jan Belder (1966～) ○CD名：Domenico Scarlatti Keyboard Sonatas K86-98
○レーベル・番号 BRILLIANT CLASSICS 93546/6 ○楽器製作者：Harpsichord, Cornelis Bom, Schoonhoven (オランダ), 1997 ○演奏時期：2001年春 ○演奏時間：5分27秒 ○♩≡233

《前半》

【開始部】第1～25小節 tutti

○第1～10小節：trは下から，第10小節は3回目は長いtrになる。

○第11～18小節：3回のtrは次の小節まで続く。

○第19～25小節：力強い。rit.で第25小節のカデンツの長い下からのtrにつなぐ。

【終極調性開始部】第26～78小節 solo

○第26～33小節：3回のtrは次の音が始まるまで長く，左はレガート。

○第33～48小節：同音反復の始まりのポーズがある。左は第35・38・41小節を除きノンレガート。

○第48～56小節：3拍目，下降の始まりのポーズがある。優雅な感じで大人しく下降する。

○第56～65小節：第56・60・64小節の3拍目の前にポーズがある。と同じく淡々と上下動を繰り返す。第64小節はrit..

○第65～78小節：68・75小節目の“ナポリの6度”⁵⁾に向かい4小節は長く弾かれ，中間はやや速く軽い。第71小節3拍目の前にポーズを置いてフレーズを表わす。左の三和音はアルペジオ。

【終極調性確立部】第78～94小節 solo

○第78～94小節：バスのEの前にポーズが入る。○第90・92小節：リピート，右は装飾音あり。

【終結部】第94～108小節 tutti

○第94～102小節：軽快。第94・98小節の2拍目前のポーズは少し。○第102～107小節：ノンレガート。

【終止】108～114小節 tutti

○第108～114小節：第110小節以降スタッカートでなくなる。右はrit.になってカデンツへ。速さは戻り，最後のtrは下から。

《後半》

【開始部】第115～137小節 tutti

○第120小節のBは少し強い。第126小節の3拍目の前にポーズがある。

○第137小節：カデンツ，長くtrも下から長く

【終極調性開始部】第138～165小節 solo

○第138～144小節：右，tr下から長くtr。左，レガート

○第145～157小節：同音反復の始まりの前にポーズはなし。上昇はだんだん早くはならない，同じ速さ。調子良く，華やか軽快にさっぱりと第157小節以降のトランペットを思わせる箇所続く。

○第157～165小節：スタッカートにはせずゆっくりおおらかに。

【終極調性確立部】第165～181小節 solo

○第165～180小節：急がず優雅。

【終結部】第181～205小節 tutti

○第181・185小節：2拍目，少しポーズあり。○第189・191(少し)・193・195・199小節：3拍目(第199小節は1拍目)の前にポーズあり。○第199小節から最後までrit.になる。

【終止】 第 205 ～ 211 小節 tutti

○ 1 拍 1 拍はつきり、最後の tr は下から。

2.1.3 渡邊順生 (2001)

○演奏者：渡邊順生 (1950 ～) ○CD 名：チェンバロの歴史と名器 Vol.1 ○レーベル・番号 ALM Records[ALCD-1038-1039] ○楽器製作者：1-manual Harpsichord by Martin Skowronek, Bremen, 1980 18 世紀イタリアーポルトガル様式 (特定のモデルなし) ○演奏時期：2001 年 9 月 ○Booklet editor：渡邊順生 ○演奏時間：4 分 49 秒 ○♩ = 264

《前半》

【開始部】 第 1 ～ 25 小節 tutti

○第 1 ～ 10 小節：スタッカートに近い、tr は最初と次は上から長めに、第 10 小節は 1 音目と 2 音目の間にポーズあり、長さは前の二つと同じ。○第 11 ～ 18 小節：tr は 2 小節ずつ分ける。○第 19 ～ 25 小節：力強いスタッカート、やや accel. になる。カデンツの tr は上から、長い。

【終極調性開始部】 第 26 ～ 78 小節 solo

○第 26 ～ 33 小節：3 回の tr は下から、次の音が始まるまで長く、左はレガート。

○第 33 ～ 48 小節：第 33 小節同音反復の始まりはポーズなし、左は第 35・38・41 小節を除きノンレガート。第 46 小節の 0.5 拍目のあとにポーズを取る。○第 48 ～ 56 小節：第 48 小節 3 拍目、下降の始まりにポーズ、バスの E を強調。○第 56 ～ 65 小節：淡々と上下動を繰り返す。○第 65 ～ 78 小節：“ナポリの 6 度”のある 68・75 小節目が rit. に弾かれ、中間は a tempo。左の三和音はアルペジオ。

【終極調性確立部】 第 78 ～ 94 小節 solo

○第 78 ～ 94 小節：全てのバス E の前にポーズが入る。

【終結部】 第 94 ～ 108 小節 tutti

○第 94 ～ 102 小節：軽快に飛ばす。第 94 小節の 2 拍目の前に長めのポーズがある。左は飛ぶところ以外レガート。○第 102 ～ 107 小節：スタッカート。rit..

【終止】 108 ～ 114 小節 tutti

○スタッカート、rit. のままカデンツへ、tr は下から、比較的短い。

《後半》

【開始部】 第 115 ～ 137 小節 tutti

○繰り返しは同じ。第 120/122 ～ 124/127 ～ 129 小節の B にアクセントあり。第 137 小節：カデンツ、長く tr は AB で下から、たいへんに長い。

【終極調性開始部】 第 138 ～ 165 小節 solo

○第 138 ～ 144 小節：右、tr は下から長く。左、レガート

○第 145 ～ 157 小節：同音反復の始まりの前にポーズあり。上昇は盛り上がりは見せない。調子良く、華やかで軽快にさっぱりとうしろのトランペットを思わせる箇所が続く。左はノンレガート。

○第 157 ～ 165 小節：スタッカートだが、強くはしない。

【終極調性確立部】 第 165 ～ 181 小節 solo

○左右の手の交差がたいへんにリズムカル。ポーズなし。○第 171・2/179・180 小節の左はノンレガート。

【終結部】 第 181 ～ 205 小節 tutti

○第 181・185 小節 (2 拍目), 第 189・191・193・195 小節 (3 拍目), それぞれの前にポーズあり.

○第 199 小節あたりから最後までやや rit. になる.

【終止】 第 205 ~ 211 小節 tutti

○1 拍 1 拍はつきり, たたみかけるように. 最後の tr は下から長く. 1 回目はトリルの第 1 音と第 2 音の間にポーズあり, リピートの時は長い tr が続く.

2.1.4 Lester (2005)

○演奏者: Richard Lester ○CD 名: Scarlatti, D.: Keyboard Music, Vol.6 ○レーベル・番号 Nimbus NI 1730 ○演奏時期 2005 年 1 月 ○演奏時間 5 分 53 秒 ○速度 ♩ = 216

《前半》

【開始部】 第 1 ~ 25 小節 tutti

○第 1 ~ 10 小節: 落ち着いた始まり. リピートは引きずるように始まる. tr は上からゆっくり, 第 10 小節は長く. リピートは装飾音が E-F#-E-D-E. ○第 11 ~ 18 小節: tr は上から. ポーズを置いて開始され短く終わり, 2 小節ずつ切れる. ○第 19 ~ 25 小節: 力強いスタッカート. カデンツの前で rit. になり, tr は上から長く.

【終極調性開始部】 第 26 ~ 78 小節 solo

○第 26 ~ 33 小節: 3 回の tr は下から, 次の音が始まるまで長く, リピートは早めに tr が終わる. 左はレガート. ○第 33 ~ 48 小節: 第 33 小節の同音反復はゆっくり始まり a tempo. 左は第 35・38・41 小節を除きノンレガート. ○第 48 ~ 56 小節: フレーズの終わり (第 52・56, および次の 60・64 小節) は rit.. ○第 56 ~ 65 小節: tr は下から. ○第 65 ~ 78 小節: 68・75 小節目の“ナポリの 6 度”は rit., 中間は a tempo. 左の三和音はアルペジオ.

【終極調性確立部】 第 78 ~ 94 小節 solo

○第 78 ~ 94 小節: バスの E の前にポーズはなし. テンポも変わらず.

【終結部】 第 94 ~ 108 小節 tutti

○第 94 ~ 102 小節: 軽快に飛ばす. 第 94 小節の 2 拍目前のポーズなし. 左は全てノンレガート.
○第 102 ~ 107 小節: スタッカート. rit..

【終止】 108 ~ 114 小節 tutti

○たたみかけるように rit.. ヘミオラを先取り. 左, アルペジオ風で, tr は上から, 比較的短い.

《後半》

【開始部】 第 115 ~ 137 小節 tutti

○第 115 ~ 126 小節: 長く丁寧に. ○第 120 小節: 1 拍目にアクセント. ○第 122.3, 126.7 小節: rit. と a tempo. ○第 126 小節: 3 拍目前にポーズ. ○第 133 ~ 小節: accel.. ○第 137 小節: たたみかけるように, 早くなり, カデンツは長く.

【終極調性開始部】 第 138 ~ 165 小節 solo

○第 138 ~ 144 小節: 右, tr 下から短く. 左, レガート. tr の後にポーズ.

○第 145 ~ 152 小節: accel. で左は第 150 小節までレガート, あとはノンレガート. 同音反復は rit.. から始まり, 下がる前まで accel. になる. ○第 157 ~ 165 小節: スタッカート, 調子良く, 気負わず.

【終極調性確立部】 第 165 ～ 181 小節 solo

○左右の手の交差がたいへんにリズムカル。ポーズなし。○第 171・2.179-180 小節, 左, レガート。

【終結部】 第 181 ～ 205 小節 tutti

○第 181 小節, ほんの少し, 第 185 小節, 長くポーズ。189・191・193・195 小節, 2 拍目, ポーズあり。

○第 199 小節あたりから最後までやや rit. になる。○第 202・204 小節, 左の D なし。

【終止】 第 205 ～ 211 小節 tutti

○第 205.6 小節: rit. から戻る。○第 207 小節～: 少し早くなる。○バスの D が強調される。最後の tr は下から長く。

2.2 ピアノ (3 種)

次に, ピアノによる演奏を 3 種について述べよう。

2.2.1 Horowitz (1964)

○演奏者: Vladimir Horowitz (1904 ～ 1989) ○ CD 名: Horowitz Plays Scarlatti Scarlatti ○ レーベル・番号: Sony Classical SICC 375 ○ 演奏時期 1964 年 ○ 演奏時間 4 分 18 秒 ○ 速度 ♩ = 294

《前半》

【開始部】 第 1 ～ 25 小節 tutti

○第 1 ～ 10 小節: 軽快な始まり。tr は上からで長い, 第 10 小節は更に長く第 11 小節に続く。

○第 11 ～ 18 小節: tr は下から切れ目なく続く。I の和音を強調。

○第 19 ～ 25 小節: カデンツの前で rit. になり, tr は上から, たいへんに長い。ここまで, 抑揚なく快適に飛ばす。カデンツが強いだけで, あとは強弱の変化はない。

【終極調性開始部】 第 26 ～ 78 小節 solo

○第 26 ～ 33 小節: mp. 3 回の tr は下から, 次の音が始まるまで長く。左はノンレガート。

○第 33 ～ 48 小節: 第 33 小節同音反復はポーズなく即座に始まる。左は第 35・38・41 小節を除きノンレガート。○第 48 ～ 56 小節: 3 拍目, 暗く弱い。繰り返しも同じ音色で。ポーズ・rit. なし。○

第 56 ～ 65 小節: tr は下から。第 60・64 小節の前から rit.. 第 57 ～ 64 小節の繰り返し部分は弱い。

○第 65 ～ 78 小節: < で 68・75 小節目の“ナポリの 6 度”に至る。中間は弱く, 左の三和音はアルペジオにはならない。

【終極調性確立部】 第 78 ～ 94 小節 solo

○第 78 ～ 94 小節: バスの E の前にポーズあり。中間部分まで<。中間部分から跳躍の繰り返し部分までずっと弱い。

【終結部】 第 94 ～ 108 小節 tutti

○第 94 ～ 102 小節: mf. 軽快に飛ばす。第 94 小節の 2 拍目の前にポーズあり, 第 98 小節の 2 拍目前の前にはなし。第 98 小節からの繰り返し部分は弱い。左は音程が飛ぶ箇所以外レガート。

○第 102 ～ 107 小節: mf. で最後まで続く。右も左もスタッカートで活発。

【終止】 108 ～ 114 小節 tutti

○第 102 小節から続く。カデンツに向かい rit.. tr は上からで長い。

《後半》

【開始部】 第 115 ～ 137 小節 tutti

○第 115～126 小節：大人しく丁寧に。○第 124・125, 129・130 小節：p.

○第 131～小節：<. ○第 137 小節：< f, カデンツは長い。

【終極調性開始部】第 138～165 小節 solo

○第 138～144 小節：軽快に, tr は上から。左, レガート。○第 145～157 小節：軽く平坦に。スタッカート, 調子良く。○第 157～165 小節：, 特に気負わず, 繰り返しは p.

【終極調性確立部】第 165～181 小節 solo

○左右の手の交差がたいへんにリズムカル。ポーズなし。前半は中間部分も含め強く, 後半は弱い。

○第 171-2.179-180 小節, 左, ノンレガート。

【終結部】第 181～205 小節 tutti

○第 181-197 小節, 繰り返しは弱い。フレーズは 2 拍目から。右のポーズなし。○第 199 小節<.

【終止】第 205～211 小節 tutti

○やや弱く, 速くなる。バスの D を強調。最後の tr は上から長く。

2.2.2 Anne Quffélec (1970)

○演奏者：Anne Quffélec (1948～) ○CD 名：Scarlatti Sonatas ○レーベル・番号：apex 0297 44353 2 ○演奏時期：1970 年 3 月 20 日 ○演奏時間 4 分 30 秒 ○速度 ♩ = 211

《前半》

【開始部】第 1～25 小節 tutti

○第 1～10 小節：軽快な始まり。スタッカート。tr は下からで長い, 第 10 小節は更に長く第 11 小節に続く。○第 11～18 小節：tr は下から切れ目なく続く。I の和音を強調。

○第 19～25 小節：第 23 小節で ff になる, tr は下から, たいへんに長くで力強い。

【終極調性開始部】第 26～78 小節 solo

○第 26～33 小節：mp. 3 回の tr は下から, 次の音が始まるまで長く。左はレガート。

○第 33～48 小節：第 33 小節同音反復はポーズなく即座に始まる。左はレガートが続く。

○第 48～56 小節：やや弱く暗い。音は弱くなる。繰り返しも同じ音色。下降の始めりにアクセントあり。第 51・55 小節の G に # がつく⁶⁾。○第 56～65 小節：tr は下から。2 小節ずつ強弱を繰り返す。

○第 65～78 小節：<で 68・75 小節目の「ナポリの 6 度」に至る。中間は弱く。左の三和音はアルペジオにはならない。

【終極調性確立部】第 78～94 小節 solo

○第 78～94 小節：バスの E の前にポーズあり。中間部分まで f。中間部分から跳躍の繰り返し部分までずっと弱い。左は全てノンレガート。

【終結部】第 94～108 小節 tutti

○第 94～102 小節：第 94～97 小節は弱く, あとの 4 小節は強い。軽快に飛ばす。左は音程が飛ぶ箇所以外レガート。

○第 102～107 小節：第 102 小節から<. mf で最後まで続く。右も左もスタッカートで活発。

【終止】108～114 小節 tutti

○第 108 小節で ff. カデンツに向かい少し弱まる。tr は下からで長い。

《後半》

【開始部】 第 115 ～ 137 小節 tutti

○第 115 ～ 132 小節：柔和。○第 133 小節から。○第 137 小節：< f, カデンツは長い。

【終極調性開始部】 第 138 ～ 165 小節 solo

○第 138 ～ 144 小節：はっきり, tr は上から。左, レガート。○第 145 ～ 157 小節：< 第 153 小節。スタッカート, 快適に。第 155 小節は 1 回目は F # -G-A-F-#- E- D (2-2-4 Pletnev のリピートとは違う), 2 回目は楽譜通り。左はレガート。○第 157 ～ 165 小節：ff, 繰り返しは p。

【終極調性確立部】 第 165 ～ 181 小節 solo

○全体が p。左右の手の交差がたいへんにリズムカル。繰り返しの 2 回目も 1 回目と同じ。

○第 171-2.179-180 小節, 左, レガート。

【終結部】 第 181 ～ 205 小節 tutti

○第 181 ～ 184 小節は弱く, あとの 4 小節は強い。第 181 小節 2 拍目前にポーズ。第 189・190 小節から 2 小節ずつ第 196 小節まで弱い→強い。○第 189 小節 3 拍目 Bb, 第 191 小節 3 拍目 B。第 193 ～ 196 小節は第 191 ～ 194 小節のリピート。○第 197・198 小節, ♯が取れる。○第 199 小節から。

【終止】 第 205 ～ 211 小節 tutti

○強い。バスの D を強調。最後はやや弱くなって tr は下からで長い。リピートは強いままで終わる。

2.2.3 Pletnev (1994)

○演奏者：Mikhail Pletnev (1957 ～) ○CD 名：Domenico Scarlatti ○レーベル・番号：Vergin Classics
7243 5 45123 2 2 ○楽器：ピアノ Steinway ○演奏時期：1994 年 10 月 10 ～ 11 日 ○演奏時間 5 分
00 秒 ○速度 ♩ = 253

《前半》

【開始部】 第 1 ～ 25 小節 tutti

○第 1 ～ 10 小節：軽快な始まり。tr は上からで長い, 第 10 小節は更に長くトリル。

○第 11 ～ 18 小節：tr は下から速く切れ目なく続く。I の和音を強調。

○第 19 ～ 25 小節：rit., tr は上から, たいへんに長い。左もオクターブでトリル。

【終極調性開始部】 第 26 ～ 78 小節 solo

○第 26 ～ 33 小節：tr なし, 左ノンレガート。○第 33 ～ 48 小節：軽い同音反復, ポーズなし。左は第 35・38・41 小節が全て 4 分音符 + 8 分音符のリズムになり⁷⁾ ノンレガート。

○第 48 ～ 56 小節：暗く弱くなる。繰り返しは更に弱くなる。第 51・55 小節の G に # がつく⁸⁾。

○第 56 ～ 65 小節：前の部分よりははっきり弾かれるが, 繰り返しも含めて弱い。dim. になっている。

○第 65 ～ 78 小節：弱いまま強さは変わらず第 68 小節目の“ナポリの 6 度”に至る。中間部の第 69 ～ 71 小節が強くかつ速くなる。繰り返しも同じ。“ナポリの 6 度”の前で rit.. 左の三和音はアルペジオにはならない。

【終極調性確立部】 第 78 ～ 94 小節 solo

○第 78 ～ 94 小節：バスの E の前にポーズあり。中間部分が強く速く, 特に左手のスタッカートが強調して弾かれる。

【終結部】 第 94 ～ 108 小節 tutti

○第94～102小節：軽快に飛ばす。第94～97小節は強く、2回目の第98～101小節は弱く。左はスタックカート。

○第102～107小節：右も左もスタックカートで活発。第103小節からのAのタイがなく。後半の形と同じになる。

【終止】108～114小節 tutti

○<になる。左は第110～114小節、オクターブでトリルになる。

《後半》

【開始部】第115～137小節 tutti

○第115～118小節：大人しく丁寧に

○第119～：柔和になる。第126小節3拍目の前にポーズ（フレーズが切れる）。第133小節からペダル。<。○第137小節：f，カデンツは長い。リピートは弱い。

【終極調性開始部】第138～165小節 solo

○第138～144小節：快活に、trなし。左、ノンレガート。○第145～157小節：軽い同音反復。スタックカート、調子良く。第155小節：2回目のみF#-A-G-F#-D。○第157～165小節：軽く、p。

【終極調性確立部】第165～181小節 solo

○手の交差がたいへんにリズムカル。ポーズなし。1回目は中間部分も含め強く、2回目は弱い。

○第171-2.179-180小節、左、ノンレガート。

【終結部】第181～205小節 tutti

○第181-188小節、繰り返しは弱い。○第189～198小節は省略される。

【終止】第205～211小節（省略されていない元の小節数による） tutti

○<になる。左は第207～211小節、オクターブでトリルになる。

2.3 他楽器による編曲（2種）

最後に、カスタネットを含む管弦楽・サクソフォン・ギター用に編曲されたものについて述べよう。

2.3.1 カスタネットを含む管弦楽

○演奏者：Orquesta de Camara de Madrid José M.Franco Gil（指揮） Lucero Tena（カスタネット）

○CD名：D. スカルラッティ（等） カスタネットと管弦楽のための編曲集○編曲者：不詳○発売元：Warner Classics 190295764159 ○演奏時期：不明○演奏時間：6分11秒○速度：♩≡204

《前半》

【開始部】第1～25小節 tutti

○第1～10小節：管楽器による演奏。trは下から。第10小節は長く。第6・8・10小節にトライアングルあり。軽い。○第11～18小節：右、管楽器、左、弦楽器、打楽器をバックに<で盛り上がる。管楽器を拍ごとに吹いてtrを表し1の和音を強調。盛り上がり第19小節からはトライアングルも加わる。○第19～25小節：強い。1拍ずつトライアングルが打たれる。第19～20小節の上から2番目の音はE-E-F# / E-D-E / F#-E-Dとなり、1小節増える。左は第20～22小節のリズムで対応する。カデンツのtrはトライアングルで表す。たいへんに長く壮大。

【終極調性開始部】第26～78小節 solo

○第26～33小節：Soloの感じを出している。カスタネットが始まる。カスタネットは上昇部は32

分の1音符、下降部は8分の1音符で打つ。左は管弦楽によるレガート。○第33～48小節：第41小節まで原曲の拍をカスタネットでなぞる。第42小節からは32分の1音符で、左は管弦楽によるレガート。○第48～56小節：第48小節3拍目からカスタネットは抜ける。下降は左も右も前半は管楽器、後半は弦楽器で、右はメロディーを弾くが、左のバスは右をなぞる優雅なメロディーに変わる。第51・55小節のGに#がつく⁹⁾。○第56～65小節：第57小節目からカスタネットが戻り1小節に16分の1・1回+8分の1・2回のリズムが続く。繰り返しは強くなる。○第65～78小節：カスタネットは8分の3拍子になる。＜で第68小節目の高潮に至る。“ナポリの6度”はBのbが取れ解消される¹⁰⁾。中間部の第69～71小節が強かつ速くなる。繰り返しも同じ。“ナポリの6度”の前でrit.. 左の三和音はアルペジオにはならない。

【終極調性確立部】 第78～94小節 solo

○第78～94小節：単純でさっぱりとした演奏になる。管楽器がメロディを弾くが、後半の方が強い。カスタネットは前半のみで第85小節まで、出だしのみ8分の1拍子、あとは1拍目は休み、2拍目から32分の1拍子で第78小節から第85小節まで続く。第84小節3拍目・第85小節1拍目は、G-E-F # -Dになる（繰り返しも同じ）。

【終結部】 第94～108小節 tutti

○第94～102小節：tuttiの感じがよく出ている。カスタネットは右のリズムに合わせる。第94・95、98・99小節を強く。左は弦楽器によるレガート。第97小節2拍目はB、第98～101小節は第94～97小節の繰り返しとなる。第94～95小節と第98～99小節の右オクターブは強い。

○第102～107小節：カスタネットはヘミオラの前まで8分の1+三連符のリズムで進む。f。楽器が揃い tuttiの感じを更に強く出す。

【終止】 108～114小節 tutti

○F。カスタネットはヘミオラの部分は32分の1で連打する。第110小節からdim.. ヘミオラに合わせて続く、カスタネットによる最後のtrはゆっくり続く。

《後半》

【開始部】 第115～137小節 tutti

○第115～126小節：管弦楽により優しくおおらか。第120小節のBのオクターブは消える。

○第126～132小節：管楽器が表面に出る。○第133小節：＜。f。第135小節からカスタネット。最初は16分の1、カデンツではtr、カデンツはカスタネットで長く。

【終極調性開始部】 第138～165小節 solo

○第138～144小節：trはカスタネットで。カスタネットは上昇部は32分の1音符、下降部は8分の1音符で打つ。左は管弦楽によるレガート。○第145～157小節：カスタネット、楽譜通りに刻む。左は弦楽器による簡単な伴奏。第151小節＜第153小節。第153小節からカスタネットは32分の1で第157小節まで。管弦楽も加わる。○第157～165小節：トランペットにより力強く。カスタネットは休む。

【終極調性確立部】 第165～181小節 solo

○メロディーが原譜と全く違う。前半は第78～94小節と似ている。1回目はカスタネットとトライアングルで静かに。中間部は原譜の通り。2回目、トランペットなどの管弦楽で賑やか、カスタネット沈黙。最後の半拍到トライアングルになる。

【終結部】 第 181 ～ 205 小節 tutti

○第 181 ～ 188 小節, カスタネットは右のリズム通り. 管弦楽で伴奏. 第 184・188 小節 2 拍目は D → E. 第 189 ～ 192 小節には打楽器が入る. カスタネット, 第 191 小節からは 1 拍目と装飾的に使用. ○第 193 小節 3 拍目, b がつく, 第 195 小節 1 拍目, # が落ちる, 第 198 小節, メロディーが E-G-C# になる. ○第 199 小節は D-F # -A に変わる. f. 第 199 小節以降, カスタネットが 1 + 2 のリズムになってヘミオラに合わせフェルマータに続く.

【終止】 第 205 ～ 211 小節 tutti

○第 207 小節から p になる. カデンツはカスタネットの長いトリルになる.

2.3.2 ギター

○演奏者: Sérgio Assad/Odair Assad ○CD 名: Sérgio & Odair Assad play Raneau Scarlatti Couplin Bach ○レーベル・番号: Nonesuch 603497133864 ○演奏時期: 不明 ○演奏時間: 4 分 59 秒 ○速度: ♩ = 255

《前半》

【開始部】 第 1 ～ 25 小節 tutti

○第 1 ～ 10 小節: やさしい響き. tr は上から. >. 第 10 小節は前と同じ位長くする. ○第 11 ～ 18 小節: 2 音節ずつ切って, 軽やかに音を重ねてゆく. ○第 19 小節～: たたみこむように 21 から accel., 第 24 小節で rit.. ○第 25 小節: フレーズの終わりは上から tr, フェルマータは長い.

【終極調性開始部】 第 26 ～ 78 小節 solo

○第 26 ～ 33 小節: tr 下から, 軽快, 左, レガート. ○第 33 ～ 48 小節: 出だしにポーズあり. 第 35・39・41 小節: レガート. ○第 48 ～ 56 小節: 少し暗い. <. 繰り返しは同じように演奏される. ○第 56 ～ 65 小節: tr は全てなし. 第 57 ～ 60 小節が強いだけで, あとの繰り返しは弱く演奏される. ○第 65 ～ 78 小節: < で第 68 小節目の高潮にいたる. 中間部の第 69 ～ 71 小節は軽く演奏されるが弱くはならない. 繰り返しも同じ. 左の三和音はアルペジオ.

【終極調性確立部】 第 78 ～ 94 小節 solo

○第 78 ～ 94 小節: 跳躍部は弱い. 中間部は繰り返しも含めやや強い.

【終結部】 第 94 ～ 108 小節 tutti

○第 94 ～ 102 小節: 前半は強く, 後半は弱く. ○第 102 ～ 107 小節: < 第 108 小節.

【終止】 108 ～ 114 小節 tutti

○第 109 小節が山. 第 110 小節からは dim, カデンツの tr は上から軽く. 長くない.

《後半》

【開始部】 第 115 ～ 137 小節 tutti

○第 115 ～ 126 小節: 叙情的. 第 126 小節 2 拍目 C # → C. ○第 126 ～ 132 小節: < かつ rit. になる. ○第 133 小節: < m f. 第 136 ～ 137 小節のタイはない. 第 137 小節は >, tr は A-G- # -A.

【終極調性開始部】 第 138 ～ 165 小節 solo

○第 138 ～ 144 小節: 軽く. tr は下から次の音に続ける. 左はレガート. ○第 145 ～ 157 小節: 同音反復の始まりの前にポーズあり. accel.. 第 151 ～ 155 小節のオクターブの和音はなし. < 第 153 小節第 1 拍目にアクセント. ○第 155 小節: F#-G-A-G-E-F#-D. ○第 157 ～ 165 小節: やや強く.

繰り返しは弱く。

【終極調性確立部】第 165 ～ 181 小節 solo

○左右交差部は弱い。バスとソプラノをさほど強調していない。中間部が 2 回とも強い。

【終結部】第 181 ～ 205 小節 tutti

○第 181 ～ 188 小節：前半は強く、後半は弱い。○第 189 ～ 196 小節、前の 4 小節は強く、後ろの 4 小節は弱い○第 199 小節～：<、強さを取り戻す。第 201 ～ 205 小節の D はあり。

【終止】第 205 ～ 211 小節 tutti

○第 205 小節で頂点に達しゆっくり、ここから遅く、弱くなる。バスはそれほど強調されない。>、rit.. カデンツの tr は上からの少し長いトリルになる。

3. まとめ

最後に、上記の分析に基づいて、構成各部の演奏法についてまとめを述べよう。

【開始部】第 1 ～ 25 小節 tutti

○第 1 ～ 10 小節：ファンファーレを思い起こさせる旋律に応じ、ノンレガート、多くの場合スタッカートで演奏される。A と Etr の和音が 3 回繰り返される際は、最後の第 10 小節を長めにする演奏が多数であるが、各回同じように演奏され第 11 小節以下に直接続く場合もある。強弱表現の可能な楽器では、以降の各部についても言えることであるが、旋律の繰り返しに強弱の変化をつけ、やり取りのように表現する場合が多い。○第 11 ～ 18 小節：I の和音は 2 小節ずつ根音から上に tr で積み重ねられてゆくが、間断なく tr を続ける演奏と、2 音節ずつ tr を切る演奏がある。○第 19 ～ 25 小節：カデンツの前では多くの演奏で rit になり、tr は特に長くなる。

【終極調性開始部】第 26 ～ 78 小節 solo

○第 26 ～ 33 小節：solo に入り軽快な演奏になる。左はレガート。

○第 33 ～ 48 小節：同音反復の始まりで、第 1 音と第 2 音の間にポーズを置く演奏が多い。繰り返しの 2 回目と 3 回目にはポーズはない。左は、右が下降する第 35・38・41 小節でレガートになる以外は、ほぼノンレガートで演奏される。この 3 箇所は、本編「2-2-3 Pletnev」においては、野間 2017 p.46 に引用した Unpublished Version の通り、全て 4 分音符 + 8 分音符の旋律になり¹¹⁾、ノンレガートで演奏される。

○第 48 ～ 56 小節：陰影を帯びた下降のフレーズであり、始まりにはポーズ、繰り返しは弱く演奏されることが多い。○第 56 ～ 65 小節：繰り返しは弱く演奏されることが多い。○第 65 ～ 78 小節：rit. やくで“ナポリの 6 度”のある第 68・75 小節目の高潮にいたる。中間部の第 69 ～ 71 小節は軽く a tempo で演奏されることが多い。繰り返しを弱くする演奏もある。左の三和音はふつうアルペジオで演奏される。「2-3-1 カスタネットを含む管弦楽」の演奏では、“ナポリの 6 度”は Longo の楽譜の通り B の b が ♯ になり解消される。

【終極調性確立部】第 78 ～ 94 小節 solo

○第 78 ～ 94 小節：左右交差の始まりではポーズを入れ、バスの A を強調、中間部は軽く流し、繰り返しも同じ強さで演奏するものが多い。

【終結部】第 94 ～ 108 小節 tutti

○第 94 ～ 102 小節：同じ旋律が二回繰り返されるが、ほぼ前半は強く、後半は弱く演奏される。○

第 102 ～ 107 小節: カデンツに向けてたたみかけるような accel. または rit. になっている演奏がある。

【終止】 第 108 ～ 114 小節 tutti

○ A のバス, 2 小節のヘミオラを強調する演奏が多い。「2-1-1 Scott Ross」は第 110 小節より 2+1, 2+1, 2, 2, 2 (2 はレガート) のリズムによりヘミオラへを準備しているのように軽快に進む, カデンツの tr は長い。

《後半》

【開始部】 第 115 ～ 137 小節 tutti

○ 第 115 ～ 126 小節: 優雅で優しく演奏されることが多い。場合によっては哀愁を帯びる。右手の B # にアクセントを置く演奏がある。○ 第 131 小節 2 拍目からロ長調へのカデンツに向けて盛り上がる。第 137 小節のフェルマータはたつぷりと長くなる。

【終極調性開始部】 第 138 ～ 165 小節 solo

○ 第 138 ～ 144 小節: 前半の第 26 ～ 33 小節 (イ長調) を原調のニ長調に移調した solo の軽快な演奏になる。左はレガート。

○ 第 145 ～ 157 小節: 同音反復の始まりの前, 第 145 小節第 1 拍と第 2 拍の間にポーズを置く演奏が多い。左は, 右の音が飛ぶ箇所はノンレガート, 飛ばない箇所はレガートで演奏されることが多い。

○ 第 157 ～ 165 小節: 前半冒頭部に類似した旋律を意識し, 強調して演奏されることが多い。

【終極調性確立部】 第 165 ～ 181 小節 solo

○ 左右の交差は迅速軽快に行われ, ポーズを入れる演奏は少ない。左右交差のソプラノの A は強調して演奏されることが多く。繰り返しを弱くする演奏もある。

【終結部】 第 181 ～ 205 小節 tutti

○ 第 181～197 小節: フレーズごとに強弱のアクセントがつけられる演奏は多いが, 強弱のつけ方は演奏によって相違がある。○ 第 197 小節, 強さを取り戻しカデンツに続く演奏が多い。

【終止】 第 205 ～ 211 小節 tutti

○ 前半第 108 ～ 114 小節と同じく, A のバス, 2 小節のヘミオラを強調する演奏が多い。「2-1-1 Scott Ross」の演奏も前半と同じ特徴がある。カデンツの tr は長い。

注

- 1) 『北海道文教大学論集 第 18 号 (2017) 「スカルラッティのソナタ K.96 について」
- 2) カークパトリック 1975 p.212 IX 他の楽器からの模倣。
- 3) レーベル・商品番号の後に*を付けた CD については, Music Library <http://ml.naxos.jp> 配信を音源としており, 同サイトで分かり得る範囲で事項を記した。
- 4) 構成各部の名称はカークパトリック 1975 p.261 「第 11 章 スカルラッティのソナタの解析」による。本文で論じるソナタ K.96 の構成要素分析は, カークパトリックによるものではなく, K.3・44・105・209・395・421 に対する分析より, 筆者が野間 2017 で判断したものである。
- 5) “ナポリの 6 度” については野間 2017 p.48 ～ 49 参照。
- 6) 野間 2017 p.47 に引用した Czerny の楽譜では # がついている (同稿では指摘していない)。
- 7) 野間 2017 p.46 に引用した Unpublished Version ではこの通りになっている。
- 8) 上記の注 5 に同じ。

- 9) 上記の注5に同じ.
- 10) 野間 2017 p.49 に引用した譜例 20 の Longo の楽譜では \flat がついていない.
- 11) 野間 2017 p.46 に引用した Unpublished Version ではこの通りになっている.

文献

- Ralph Kierpatrick, 1953, Domenico Scarlatti. (= 1975, 千蔵八郎・阪本みどり共訳『ドメニコ・スカルラッティ』全音楽譜出版社.)
- Hermann Keller, 1957, Domenico Scarlatti—Ein Meister des Klaviers. (= 1974, 小山郁之進・原田宏司共訳『クラヴィーアの大家 ドメニコ・スカルラッティ』音楽之友社
2008, 『新訂 標準音楽辞典 第二版』音楽之友社.)
- Thomas Schmacher, Scarlatti Sonatas. (= 2013, 中村菊子監修, 大竹紀子訳『スカルラッティ 鍵盤楽器ソナタ 演奏の手引き』全音楽譜出版社.)
- Ralph Kierpatrick, Scarlatti 60 Sonatas. (= 荒木雄三訳『スカルラッティ 60 のソナタ (上)』全音楽譜出版社.)

A Study of the Playing Method of Domenico Scarlatti's Sonata K.96 (L.465)

NOMA Akira

Abstract: Sonata K.96(L.465) is a masterpiece of Domenico Scarlatti, and is very characteristic of his works. Last year the author outlined these characteristics in another paper. In this paper, the author outlined playing method of this masterpiece by virtuosos, 4 on the harpsichord, 3 on the pianoforte, and 2 on non-keyboard instruments.